

このふたりの男女に祝福を！番外

大トロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本編の『このふたりの男女に祝福を!』で語られることがなかつた話や、本編に出てくるキャラクター達の日常編でもあります。

時系列は結構バラバラで思いつきでやつてるので、今連載してゐる本編の過去だつたり、未来の話になります。

### 『注意』

カズアク要素があります。

カズめぐや、カズダク、カズアイ、カズクリ、カズゆんを期待している人は他の人の小説を見てください。

ここから本編【このふたりの男女に祝福を!】へ



<https://syosetu.org/novel/1831>

## 目

## 次

魔王討伐前

出会い

本当は

この銀髪のお頭と女神に誕生祭を！

この素晴らしい世界の終わりと始まりを！

蟹漁とアンデットホイホイ

4年に1度の幻の日!!ボツチの誕生日!!

この皆に愛されし主人公に祝福を！

この素晴らしい駄女神様に誕生会を！▣リメイク版▣

## 魔王討伐前

### 出会い

カズマ「さて、どうしようかなあ」

俺は今、馬小屋の藁の上に寝転がっている  
ダクネスをパーティーに入れて2日たつが、現在はクエストを受け  
ていな

何でも最近、近くの廃城に魔王軍の幹部が住み着いているそうだ  
おかげで弱いモンスターはめつきり姿を現せなくなりクエストも  
高難易度の物ばかり

どうするかはもう少したつてから決めることにし、現在はそれぞれ  
のやりたいようにしている

アクアはクエストを請けれないため  
八百屋で売り子のバイトをしている

めぐみんは捜しものがあるようで今朝から出かけている  
さつきまで俺と筋トレしていたダクネスは  
クリスの所に行くと行つて

現在、馬小屋にいるのは俺一人だ  
正直退屈で仕方ない

何かないか

カズマ「あ、そうだ。俺この街の全部見てなかつた」

俺がこの街で知っていることと言えば

ギルドの場所や、本屋とか、雑貨とか、後は工事現場に、草原と森

まだ行つたことないところがあるなあ

カズマ「そうと決まれば行くとしますか」

そう言つて俺は着替え始めた

カズマ「そういえばアクアのやつ、売り子のバイトやつてるみたい  
だがちゃんとやつてるのか見に行つたほうがいいのかこれ」

そう考えた俺は八百屋の方に行くと

カズマ「ああ、やつてるやつてる」

アクアが売り子をしてる店を見るとたくさん的人が集まってる  
よく見ると八百屋の入り口でアクアが手品してるな

手に持つた大根が突然小さくなつて手からなくなつたかと思えば  
アクアが耳に手を当てるど、耳に手を当てた手から元の大きさに戻つ  
た大根が……まじでどうなつてるのか

あいつの手品は

そういうばいつかの悪魔討伐の祝いの席で宴会芸スキル使つて盛  
り上げてたな

なんていうか

カズマ「そつちの道で生きていつたほうがいいんじゃないか？」

もうあれはスキル以外の才能だと思つてしまふ

カズマ「ちょっとギルドに行つて街の地図もらえないか確認しに  
行つてくるか」

カズマ「なんであいつがいるんだ！」

俺がギルドの扉を開くと、いつか俺とアクアに絡んできたチンピラ  
系の冒険者、名前なんだつけ、ダクトだつけ、ダストボックスだつけ、

が仲間達と一緒に依頼が貼られた掲示板の前で嘆いていた  
関わりたくないから中まで入らず外に出ることにした  
もう昼食の時間だから近くの店にあるサンドイッチを買って食べ  
ようとしたが

カズマ「うん？」

俺がサンドイッチを買った店の前に1匹の猫がいた  
黒い毛をしたどこにでもいる様な猫  
ただ俺の目に止まつたのは他にある  
それはこの猫、背中に羽根があるのだ

カズマ「背中に羽根がある猫……異世界つて感じだな」

黒猫「なーお」

黒猫が俺を見て鳴いたかと思うと  
近くの路地に入つていった

カズマ「あ、まで」

黒猫に心惹かれた俺は、黒猫を追つて路地に入つて行つた

カズマ「どこまで続いてるんだ。この路地は」

路地に入つて黒猫を追つてそろそろ3分位たつたが未だに黒猫に  
追いつけてない

時折黒猫は、まるで俺が付いてくるのを確認するかのように後ろを見  
てくるがすぐに走つていく

何だかあの黒猫に誘導されてるみたいな気分になつてきた俺だが、  
興味が湧いて更に付いて行き、やがて

カズマ「やつと、路地から出れた。うん？」

路地に出た俺が最初に見たのは、少し薄暗い、いかにも怪しい感じ

のある店だった

カズマ「《ウイズ魔道具店》？店の名前か」

よく考えたら魔道具店なんて、異世界に行かないと見れないような店を見たのは、これが初めてか

俺が店の看板を見ていると

黒猫「なーお」

さつきまで俺が追いかけてた黒猫が店の中に入つて行つた

カズマ「これも何かの縁か。少しお邪魔させてもらおうか」

そう言つて俺は店の扉を開け、中に入つた

カズマ「へへえ、これが魔道具店か」

店の中は少しこじんまりとした雰囲気で溢れかえつており、魔道具

店と言うだけあって様々な魔道具やポーションがあつた

カズマ「そういえばあの黒猫はどこ……!?」

俺はさつき店に入つていった黒猫はどこか、店の中を見渡すと、店のカウンターに頭を付ける形で倒れている人がいた

カズマ「おい！大丈夫か！」

カウンターに入った俺はカウンターに倒れている人を軽く揺する

と

???「う……ん」

倒れていた人が声を出した

???「……か……ま……た」

カズマ「え？」

???「お……なか……すき……まし……た」

カズマ「……」

あまりにもお腹が空いた様子だったので、俺は持つてたサンドイツ

チを

?? 「ありがとうございました！見ず知らずの方に助けて頂いただけに飽き足らず、あなたの昼食までいただいて！」

俺の前でカウンターに倒れていた人……女性がペコペコ頭を下げている

俺は目の前の女性を見る

髪は茶色で見た目が20代くらいで顔が整っている美女だ  
そしてでかい、胸が

仲間の中では、アクア、ダクネス  
知り合った人の中では、ルナ

あいつらよりもでかい

ウイズ「申し遅れました。ウイズ魔道具店の店主のウイズといいます」

カズマ「あんた店主だつたんだ。ていうか店の店主が空腹で倒れるつて、あんまり儲かつてないんじやないか？」

ウイズ「う……うちは魔道具の種類は豊富なんですが、なぜか買う人がいないんですよ、お恥ずかしい話。実はもう5日ほど何も食べてなかつたので5日ぶりに固形物を口にできたので助かりました」と、ウイズは苦笑いした

黒猫「なーお」

カズマ「あ、さつきの」

さつき店の中に入つて行つた黒猫が出てきた

ウイズ「猫ちゃん！」

ウイズが黒猫に近づくと黒猫はウイズに飛び乗つてきて  
ウイズはそのまま黒猫を抱き上げた

うわ黒猫のやつ、ウイズの胸を肉球でつつついて遊んでやがる  
とても他のやつに見せられるやつじゃないな

ウイズ「この子、今から数日前に店の近くにぼろぼろになつていたのを保護したんです。それからこの子、店から離れないでこうして住み着いているんですよ」

カズマ「へうえ、懐かれた訳か。あ！」

そうか、そういうことか

ウイズ「どうかしましたか？」

カズマ「いやなこいつ、昼ごはんを食べようとした俺に鳴いたかと思つたら路地に行くから付いて行つたんだよ。何度か、俺を見ながら路地を進んで行つて、この店についたんだ。もしかしたらこいつ、俺をこの店まで連れてきたんじゃないかって思うんだ」

ウイズ「え、そなんですか」

カズマ「多分自分を助けてくれたウイズに恩返しがしたかつたんじやないかこいつは」

猫が恩返しをするつて、ひと昔前の映画にありそうのが現実にもあるんだな

ウイズ「……そうだつたんですね……ありがとうございます・猫ちゃん」

黒猫「なーお」

ウイズのお礼に黒猫は氣にすると言わんばかりに鳴いた

カズマ「さて、結構話したな、俺もうそろそろ帰るわ」

ウイズ「あ、そうですか。本当にありがとうございました」

黒猫「にゃーん」

俺が帰ると言うと、ウイズがまたお礼を言つてきた

黒猫も多分お礼のつもりで鳴いたんだろ

ウイズ「あ、そいいえばまだあなたの名前、聞いてませんでした。あの、お名前は？」

俺は店の扉に触ろうとしたが、ウイズに名前を聞かれて手を止めた

カズマ「……和真、サトウカズマ。それが俺の名前だ」

ウイズ「カズマさんですね。あなたの名前、覚えておきます」

そう言つて俺に笑顔を見せる、やっぱり美人だな

カズマ「また来るよ、ウイズ」

そう言つて俺は店を出た

カズマ「今度来る時は、何か食べ物持つていこうかなあ」

そう考えながら俺は来た道を戻るのだつた

これが後に、自分の友であり、自分の師匠となる  
ウイズとの出会いになる事を、この時の俺は知らなかつた

本当は

ウイズ「あの……カズマさん……本当にすみません。店員でも無いのに手伝つて頂いて……」

カズマ「ん？ なあに言つてんだウイズ。俺はお前に教えてもらつている立場なんだぞ。これくらいの事なら、いくらでもやるさ」

俺佐藤和真は、リツチー兼魔王軍幹部兼魔道具店主兼師匠のウイズの店の手伝いをしている

普段ウイズに魔法の事を色々教えてもらつているからこういう手伝いは何回かしている

カズマ「ふう、ウイズ、これはこっちでいいんだよなあ？」

ウイズ「あ、はい。それを置いたら次はこれを一箇所にまとめて下さいね」

カズマ「あいよ」

しかし、この店は客が来ない割に商品が多くなんだよ

これは後でウイズに言つて商品を減らすように言うべきだな

カズマ「あれ？ 何だこれ」

商品が置いてある棚の後ろにある隙間に何かある

カズマ「……スクロールか？」

ウイズ「あれ？ こんな所にスクロール何てあつたんですね。ですが何のスクロールだったのか覚えてないんですよ」

カズマ「ウイズでも分からぬのか。それにしても……ずいぶんぼろぼろだな……今でも使えるのか？」

そう思つてスクロールを開いてみると

スクロールから強い光がでて俺を包み込む

カズマ「うわ——」

ウイズ「カズマさ——」

強い光に包まれてウイズの声が途切れていった

カズマ「……一体どこなんだここは？」

光に包まれて見えなくなつたが光が消えて目を開くとそこは見知らぬ部屋だった

部屋は石造りになつていて薄暗い所だ

カズマ「さつきのスクロールはさしづめテレポートのスクロールつてところか！」

急に俺の『敵感知スキル』が反応した

カズマ「(……結構な数の敵がいるな……しかも特にでかいのが下にいるな)」

まずいな…俺剣と弓矢置いてきてるから戦いになつたら勝ち目ないな

ここにいるのは危険だと思つた俺は、場所確認のためにこの部屋に唯一ある窓に行き外を見る

カズマ「……これからアクセルが見える……と言う事はここは廃城……ヤバ！そういえば廃城には今魔王軍の幹部がいるんだった!!」

ますますここにいるのは危険だと思い速く廃城からの脱出を試みたが

カズマ「(……下に降りようにも敵がたくさんいる。かと言つて窓から脱出しようにもかなり高い所にいるからな……)」  
「こういう所には秘密の抜け道とかあるのか?」

俺は近くにある壁や本を触った

カズマ「(……なんて……そう都合よくあるわけ無いかツ!?)」

俺は壁に掛けてある額縁の裏をめぐるとそこには隠し扉があつた

カズマ「……あつたよ抜け道…」

俺は隠し扉を開けて中に入った

そこは真っ暗で何も見えない部屋だった

カズマ「…『ティンダー』…」

俺は人差し指に小さい火を出して明かり代わりにした

そして周りを見るとそこには

カズマ「なツ!!」

そこにあつたのは

大量の下着類だつた

ブラジャーやら女物のパンツがたくさんあつた

カズマ「(ま、まさかここの主は女装趣味が…ん?)」

よく見るとそれぞれの下着は分けて置いてある

そしてその下着の上には

ウイズ

ウォルバク

ミズキ

分かりやすく名前入りの板が貼つてある

カズマ 「（ホツ……なんだ…ただの下着泥か……ウイズのも集めてやがる……と言う事はここにあるのは同じ魔王軍のやつから盗つか……それにしても最後の奴だけ名前が日本人だつたが……まさかだと思うが魔王側に寝返つたなんてことは……ないよな?）」

色々思うところはあるがいつまでもここに居るのは危ないから速く出たほうが

カズマ 「！」

突然扉が開いた

カズマ 「（ヤバ！誰か来た）」

俺はすばやく近くのテーブルの下に身を隠した

？？「……なんだ？…今誰か居たような気が…」

声の主は、周りを確認したが誰もいない事を確認すると扉を閉めて  
？？「ふふふ…さて、今日はどの下着を嗅ごうか……一番若いセレスティナにしようか…それともここは神であるウォルバックのにして  
神の下着を嗅ぐという背徳感に浸りながら興奮するか……いやいや  
ここはやっぱり一番付き合いの長いウイズにしようか……ああここ  
は俺のエデンだ…それにしてもウイズの奴…アクセルに店を出す  
とか言つて魔王城から出ていつてから下着の入手が出来なくなつてしまつたぞ…あいつのは特に欲しいというのに…」

カズマ 「（何で酷え会話だ）」

声の主、もといこの廃城に住み着いている魔王軍の幹部が変態の会話にしか聞こえない

逃げたい所だが、今逃げてもすぐに感づかれる…どうすれば

カズマ 「（かくなる上は）」

俺は近くにあつた本を部屋の隅に投げた

幹部 「うん?なんだ、今の音は」

姿は見えないが、これで幹部の気をそらすことが出来た

後は

カズマ「！」

バレる覚悟で突つ切る!!

幹部「む！な、何奴」

カズマ「『ティインダー』！」

俺は手から火を出して近くの下着に火を付ける

幹部「どこに向かって撃つて、ああ!!お、俺の宝が!!」

下着に火をつけたことで狼狽えた声を出している幹部の姿を見ず  
俺はそのまま扉を開けて部屋から脱出した

カズマ「はあはあ!!クソ！下に降りたはいいが敵が多くすぎてこれ以上降りるのは危険で上に戻ろうにも」  
幹部「待てええええ！俺の秘密を知ったお前は！決して生きて返さんぞ！！」  
カズマ「あいつが迫ってきてるからな」  
どうするか……こうなつたら窓から飛び降りて……だがここは高い

地面に落ちる前にバインドで木にぶら下がればあるいは  
けどそれも出来るかどうか  
下からは魔王軍幹部の配下  
上からは魔王軍幹部  
どうするか……

「ドオオオオオオオオオンンンンンン!!」

グラツ

カズマ「うわツ!!」

幹部「グウツ！なんだ今のは!?」

突然の爆音と衝撃が廃城にぶつかり、廃城が揺れた

突然の出来事に上の階からこっちに来ようとした幹部の驚いた声が聞こえた

もう、迷っている暇はないな

カズマ「アイキヤンフラーイ!!」

俺は城の窓から飛び降りた

だいたい6階ほどの高さがあった

地面に落ちる寸前に

カズマ「ツ！『バインド』！」

近くの木にバインドで飛ばしたロープを枝に巻き付いて、地面への

衝突は免れた

カズマ「はあはあイツ！やつぱり…慣れないことはするもんじゃないな

少しロープで手を切ったが大したことはない

カズマ「さあつて、ここも奴らが来るかもしれないからな、速く逃げよつと」

そう言つて俺はアクセルに向かつて走つて行つた

カズマ「(それにしてもあの爆音と衝撃……どこかで聞いたような)」

デュラハン「ききき昨日、おお俺の城に、無断で侵入した不届き者  
と、爆裂魔法を撃つた大馬鹿者は、どこのどいつだああああ!!!」  
カズマ「(うおおおおおお!!ヤあつべええええ!!俺だあああああ  
!!)」

これが、ベルディアが言っていた侵入者の正体です

この銀髪のお頭と女神に誕生祭を！

ダクネス「そういうえばもうすぐクリスの誕生日だな」

カズマ「え？ そうなのか？」

ダクネス「ああ、クリスがそう言つていたんだ。それにクリスの誕生日の日はエリス様の誕生日でもあるんだ」

めぐみん「へえ、そうなんですか」

クリスとエリス様の誕生日は一緒にありますりやあそудだな

なんたつて二人は同一人物だからな

でも待てよ

カズマ「なあ、確かに前ら女神は『この素晴らしい駄女神様に誕生日会を！ 参照』自然に生まれて来るんだよな？ なら何でエリス様の誕生日は分かんだよ（小声）」

アクア「いえ、エリスの生まれた日も分かつてないわ。ただこの日はエリスがこの世界に初めて降り立つた日なの。その日をエリス教はエリスの誕生日にしていて、それが今では世界規模で伝わっているわけ（小声）」

カズマ「あれ？ ならお前の誕生日はアクシズ教にはどう伝わっているのか？（小声）」

アクア「伝わってないわよ。私も自分の誕生日分からなかつたし、そもそもエリスと違つて私はこの世界担当の女神じやなかつたから降りる機会がなかつたのよ……まあ今は違うけどね」

カズマ「ん？」

アクア「だつて……今はこうして地上に降りられてるし……私の誕生日も出来たから……」

そうアクアは

嬉しそうな、優しい表情をしている

カズマ「アクア……そういう似合わないキャラ作りしないでくれないか、お前がやつても変なんだよ」

アクア「『ゴッドブローー！』」

カズマ 「『魔装ガード』！」

めぐみん 「あの、ふたりは何やつているんですか」

ダクネス 「またいつものやつだらうな」

16

カズマ 「そういえばその日はクリスマスもあるな」

めぐみん 「クリスマス？なんですかそれは」

アクア 「ええっとね、クリスマスって言うのはね」

俺とアクアはクリスマスの事を簡単に説明した

ダクネス 「カズマの地元ではそんな行事があるんだな」

めぐみん 「そのさんたくろーす？という人がプレゼントを配るとい

うのは魅力的でした。私の家にも来てくれませんかね」

アクア 「あら、クリスマスプレゼントは別にサンタだけがプレゼントを渡す日って訳じやないのよ。知人や親しい人にもプレゼントを渡す日もあるの」

めぐみん 「あ、それならクリスの誕生日の日は、私達の屋敷で誕生日会をやる予定ですよね」

カズマ 「ああそりだが」

めぐみん 「それならその時クリスに、誕生日プレゼントとは別でクリスマスプレゼントを渡しませんか？」

ダクネス 「それはいい考えだな」

アクア「それでクリスの誕生日会が終わった後は、私達もお互いにプレゼント渡さない?」

カズマ「それはいいがお前、それはお前も出さなきやいけないって事だが自分の貯金は大丈夫か?」

アクア「ふふふ、見くびらないでよカズマ。足りない場合はカズマの財布から」

カズマ「出さねえよ」

カズ・アク・めぐ・ダク・yun 「「「「誕生日おめでとう!!」」」  
そしてクリスもといエリス様の誕生日当日

俺達の屋敷にクリスを招き誕生日会を開いた

そして俺達だけじゃ人数が足りないとめぐみんの配慮により、ゆんゆんも参加している

クリス「皆、今日はあたしの誕生日を祝ってくれてありがとうね」  
ダクネス「何礼には及ばない。私の誕生日もクリスは祝ってくれた

んだ、お互い様さ」  
ゆんゆん「あ…あの…今日は私も呼んでくれて、あ…ありがとうございました」

めぐみん「何緊張してるんですかゆんゆんは」

ゆんゆん「だ…だつて…と…友達の…た…誕生日会に、呼ばれるこ  
となんて…め…滅多にないから……もしかしたらこれで最後になる  
かも知れないし…」

めぐみん「なりませんよ!!間違つても誕生日会に参加できるのは一生に一度何て考えないでください!!」

ううん、これは誕生日会があるたびにゅんゅんは誘った方がいいかも知れないな

ダクネス「クリス」

クリス「うん？」

ダクネス「これは私からのプレゼントだ」

そう言つてダクネスは二つの包装された箱を渡した

クリス「ダクネスありがとうね。けどどうして二個も渡すの？」

ダクネス「ああそれは

カズマ「今日は俺の国ではクリスマスなんだよ」

クリス「クリスマス？あ、聞いたことあるよ。確かサンタクロースって言う赤い服を来たおじいさんがソリに乗つてトナカイに引いてもらつてクリスマスの夜に子供の家にプレゼントを配るんでしょ？」

クリスいや、エリス様の先輩は日本担当のアクアだつたからか詳しかつた

ダクネス「だからそれにそつて、もう片方はクリスマスプレゼントにしたんだ」

めぐみん「これは私からです」

ゆんゆん「あ：あの、これは私からです」

クリス「う：ううん：嬉しいんだけど、多すぎると持ち帰りが：」

クリスがなんか言つてるけど無視して

カズマ「これは俺からな」

クリス「あ、ありがとうね……あれ？」

カズマ「どうした？」

クリス「いや、あのね助手君（小声）」

カズマ「何だ？お頭（小声）」

クリスが小声で盗賊団している時の呼び方をしてきたので俺も盗賊団してる時の呼び方をした

クリス「どうして助手君のプレゼントは二個じゃなくて三個なの？」

（小声）

カズマ「ああ、一個目はお頭用……一個目はクリスマスプレゼント

用……三個目はエリス様用（小声）

クリス「え？」

カズマ「いつも世界の為にあちこち周つて神器集めをしているクリスにちゃんと渡してやりたかったんだ。でもただ渡すんじゃなく、盗賊団のお頭として…女神様として…それぞれのアンタに渡そうって思つた（小声）」

クリス「カ、カズマさん…あ！じやなかつた助手君」

ちよつと今エリス様出てたな

アクア「じやあ後は私だけね」

そう言つてエリス様の先輩女神の青髪がプレゼントを渡した

クリス「あ、ありがとうアクアさん、あれ！」

クリスがプレゼントを見て驚いた

俺はアクアがクリスに渡したプレゼントを見ると

プレゼントは三個だつた

クリス「あ、あのアクアさん…どうしてあたしへのプレゼントが三個なの？」

アクア「ううん、なんでかしらね、なぜかクリスにはクリスマスプレゼント用とクリス用とは別で渡したくなっちゃつたのよね」

こいつはクリスがエリス様なんて分からぬいはずだ  
なのになんで

アクア「クリス…アンタはね…私の後輩とよく似ているの。私の後輩はね、真面目で一生懸命で、いつも世界が平和になりますようにつて思う位世界を思つているの。クリス、アンタも世界の為について真面目にしてるけどたまにはゆっくり休みなさいね。これは友達としての忠告よ」

そつか

例えクリスがエリス様なのかなくて分からなくとも、感じる物はある

るんだな

クリス「せ・先輩」

おひまたエリス様出てるぞ

カズマ「さ、さてこれでプレゼントは全員渡したな。今日は夜遅くまで騒ぐぞ！」

クリスの発言を誤魔化すため、俺は皆にそう言つた

ダクネス「そうだ、今日の主役はクリスだ。存分に飲んで騒いで盛り上がりようか！」

こうして俺達はそのままクリスの誕生日会を大いに楽しんだ

カズマ「さて、クリスの誕生日会は終わつた。じゃあ後は恒例のクリスマスプレゼント渡しをするか」

めぐみん「恒例と言うか、今回が初めてなんですが」

時刻は深夜にさしかかっている

ダクネス「まずは私からだな」

そう言つて、ダクネスは俺とアクアとめぐみんに箱を渡した  
めぐみん「ありがとうございますダクネス。では開けますね」  
めぐみんはダクネスにお礼を言つて箱を開けた

めぐみん「ぬ、ぬいぐるみ？」

中身はぬいぐるみだつた

アクア「あ、私もぬいぐるみね」

アクアに渡した箱の中身もぬいぐるみだつた  
と言う事は俺へのプレゼントもぬいぐるみつてことか

俺は安心した

ダクネスのことだから

SMプレイ用の縄とかだと思ったが俺の杞憂だつた  
めぐみん「それでもプレゼントがぬいぐるみとは、さすがはぬ  
いぐるみ好きのダクネスですね」

ダクネス「なつ！ち、違う、私はぬいぐるみ好きなのでは」

カズマ「嘘つけ、俺知ってるんだぞ！実は裏でお前がぬいぐるみ作  
りをしている事を知ってるんだからな」

ダクネス「なつ！なんでそれを…あいや、それは…」

めぐみん「よく見ると、縫い目が少し出ますね」

アクア「つまりこれはお店で買ったものでは無く、ダクネスの手作  
りって事ね」  
ダクネス「わ、悪いか…私がぬいぐるみ作りなんてやって…」  
自分の秘密がばれた事に少しいじけたようにダクネスが言つてき  
た

めぐみん「いえ、そんな事はありません」

アクア「むしろパーティ随一の不器用のダクネスがこんな手作業し  
てた事に驚きと頑張りを感じたわ」↑パーティ随一の器用な奴  
カズマ「お前の性癖よりは遙かにマシだつて思つた」

ダクネス「み、皆…」

アクア達が褒めたことでダクネスの機嫌が治つた  
カズマ「それにしても……」

俺はめぐみんとアクアの箱に入つていたぬいぐるみをみた

めぐみんのぬいぐるみ

ジャイアントトード

アクアのぬいぐるみ

色違ひのジャイアントトード

カズマ「なんでこのチョイスにした」

こいつらからしたらトラウマになつたりしたモンスターのジャイ

アントトードのぬいぐるみを渡すとか悪意しか感じねえ

ダクネス「あ、その…すまない…そこまで考えてなかつた」

ダクネスには悪意はないようだ

カズマ「このぶんだと俺のもジャイアントトード……か  
俺も箱を開けたが中身は

カズマのぬいぐるみ

冬将軍

カズマ「おいダクネス！なんで俺のだけ冬将軍なんだよ！」

よりによつて俺へのプレゼントのぬいぐるみは過去に俺を殺しかけた冬将軍のぬいぐるみだつた

ダクネス「だ、だつてカズマは男だからジャイアントトードよりもカツコいいモンスターの冬将軍にしたほうがいいと」

カズマ「確かにジャイアントトードよりも冬将軍がカツコいい事は認めるが俺からしたら、殺されかけた事がある冬将軍のぬいぐるみを渡してくること自体に悪意しか感じねえよ!!」

せつかく手作りのプレゼントを渡してきてこんな事は言いたくないが文句しかない

ダクネス「す、すまない。ジャイアントトードのぬいぐるみと同じで…そこまで考えてなかつた、」

カズマ「はあ…もういいよ。たかがぬいぐるみにここまで熱くなつた俺も悪かつたよ」

めぐみん「えつと、私もプレゼント渡していいですか？」

めぐみんが恐る恐るとした様子で言つてきた

カズマ「あ、ああ」

そしてめぐみんは俺とアクアとダクネスに箱を渡した

ダクネス「ありがとうございます、それじゃあ開けるな」

ダクネスがめぐみんにお礼を言つて箱を開けた

ダクネス「お守り?」

中には日本とかでよく見るお守りが入つていた

めぐみん「これはですね、紅魔族に代々伝わる魔術的なお守りです。

このお守りの中に強い魔力を持つ者の髪の毛を入れて仲間に渡すんです

です」

髪の毛を入れるつて、日本のオカルト儀式にありそうな事を平然と  
こいつは

ダクネス「そのお守りにはこう、多ければ多いほど効果があるのか  
?」

めぐみん「多いほうが良いですよ。魔王軍打倒の遠征に出るものに  
持たせるお守りは、里の者全員分の髪の毛がギッシリ詰め込まれ、  
中からはみ出すほどです」

カズマ「怖!!呪いの道具みたいになつてんじやねえか!!」

めぐみん「そんなことないですよ!!それぐらいのお守りにもなると  
確かに効果を發揮するんですよ!持ち主の身を守るだけじゃなく、そ  
の辺にポンと荷物を置いても中の物が盗まれなかつたり、荷物を落と  
したのにそれがすぐに届けられたりと、効果は絶大なんですよ」

カズマ「前半のはともかく後半のは髪の毛がはみ出てるお守りを見  
て、祟られそうだからそうしてるだけだと思うんだが」  
アクア「あそれでね、どうりで一昨日めぐみんが髪の毛頂戴なんて  
言つてきたから何なのかなあつて思つてたんだけど、そういう事だつ  
たのね」

アクアの髪の毛も入つてるのか

アクア「それじゃあ次は私ね」

今度はアクアが俺とめぐみんとダクネスに箱を渡してきた

めぐみん「ありがとうございます。開けていいですか?」

アクア「ええ、どうぞ」

めぐみんが最初に箱を開けた、中身は

めぐみん「い、石？」

めぐみんの箱には石が入っていた

ダクネス「私のも石だ」

ダクネスのも石だつた

プレゼントが石とは

これはひどいな

アクア「ふふふ、よくその石を見なさいな」

アクアが指摘して来たのでめぐみんとダクネスの石を見ると

めぐみん「あれ？ 石に何か、赤いのが出でますね……！」ア、アクア、  
もしかしてこれって…

アクア「気づいたみたいね、それは原石よ。私の石コレクションの中にはこうした鉱石の原石が混ざっているの、それはルビーの原石よ」

ダクネス「じ、じゃあ私のこれは」

アクア「それは金の原石よ」

うわ、こいつにしては中々のプレゼントをしてきたな

しかもよく見るとふたりに渡したプレゼントの鉱石はそれぞれの色に沿つたのを渡してるな

と言う事は、俺の奴は緑色の……エメラルドの原石か

川で水切りする時によく使われる平らな石

カズマ「なんでだよ！」

俺は思わず石を地面に叩きつけた

アクア「ちょ、ちょっとカズマ！ 何をそんなに怒っているのよ」

カズマ「何をじやねえだろ!! この流れなら普通は俺へのプレゼント

も原石の筈だろ！なのになんで俺のだけ川で水切りする時に使われ  
そうな石何だよ!!」

一体何の差なんだこれは

めぐみん「あの、私達にプレゼントした鉱石は、私達の色に沿つた  
物なんですが、カズマのはなかつたんですか？」

めぐみんが疑問を感じたのかアクアに聞いてきた

アクア「いいえあるわ」

あるのかよ！

なら何で

アクア「ただカズマなんかに渡すのはもつたいないって思つたから  
私の石コレクション、水切りシリーズの中で一番いいのを渡すことにつ  
したの」

カズマ「やばい、今すぐお前の顔に水切りしたくなつてきた」

こいつの顔だと何回石が飛ぶか？

一回だろうな

ならその一回に全ての力を込めて

ダクネス「待て待てカズマ、アクアの顔で水切りするな！どうして  
もやりたいなら私の顔で…」

カズマ「……萎えた」

さつきまであつた殺る気がなくなつた

めぐみん「では最後はカズマからのプレゼントですね」

カズマ「はいよ」

俺はめぐみんとダクネス：そして本当は渡したく無いアクアにも  
箱を渡した

ダクネス「ありがとうございますカズマ」

めぐみん「ありがとうございますカズマ」

アクア「ねえ、最後に皆で同時に開けない？」

アクアがダクネスとめぐみんに提案してきた

めぐみん「そうですね。私は良いですがダクネスは？」

ダクネス「私も構わないぞ」

アクア「じゃあ3・2・1で開けましょ」

そう言つてアクアは箱の蓋を掴む

遅れてダクネスとめぐみんも同じ事をする

アクア「じゃあ行くわよ…3」

めぐみん「2」

ダクネス「1！」

同時に三人は箱を開けた

めぐみん「わあ～」

めぐみんの、普段は紅い目がさらに紅くなっている  
めぐみんへのプレゼントは、杖の装飾品

もちろんただの装飾品と言う訳ではなく  
爆発系統の魔法の威力を上げるというものだ

ダクネス「これは…」

ダクネスのは、新しい剣のさやだ

今使つているものはそれなりに使い込んでいるのかかなりボロボロになつているから新しいのにすべきだとこのプレゼントにした

アクア「なんでよおおおお!!」

そしてこの青髪へのプレゼントは

空箱だった

カズマ「いやあお前なんかにクリスマスプレゼントを渡すのはもつ  
たいないとthoughtだから何も入れなかつただけだ」

この後涙目になつたアクアが掴みかかつて來たので  
アクアと乱闘になつて今日はお開きになつた

めぐみん「まさかの」

ダクネス「同じ考え方をしていたという」

カズマ「たく、あの野郎。人の好意を無下にすることしゃがつて」

俺はイライラした気持ちのまま、部屋に入つた  
カズマ「イライラするな、明日あいつの顔で絶対水切りしてや……うん？」

俺はベットに入り、布団の中に入ると、足元に何かがあつた

カズマ「……何だこれ」

俺は足元にあつたソレを取つた

それは

水色と緑色の模様の手袋だつた

カズマ「……」

俺のイライラはどこかに消えていつて、変わりに笑みを浮かべた

こんな事をする奴なんてあいつしか居ない

カズマ「…明日の晩ご飯…あいつの好きなやつでも作ろうかな」

俺はそう考えながら

手袋を着けて

眠りについた

アクア「全く！カズマつたら、せつかく人がびっくりクリスマスプレゼントをしたのにこんな事するなんて!!」

私はカズマにやられたことを思い浮かべながらイライラして部屋に入った

アクア「明日絶対カズマに仕返ししてやるわ!!……後が怖いけど……けど絶対仕返ししてやる……わ…」

私はそう考えながら布団をめくった

そこには

高級のお酒があった

アクア「え、ええ！こ、これって」

私は驚きながらも布団の中にあつたお酒を取る

アクア「…これって…」

お酒には、小さいメッセージカードがついていた

そこには

メリークリスマス

アクア

そう書いていた

アクア「……フフツ…」

私のイライラしていた気持ちはどこかに消えていって、笑みが浮か  
び、喜んでいた

こんな事する人なんて私

一人しか知らないわ

アクア「明日になつたら……謝つて……一番良い原石あげよう……う

ん：そうしよう」

そう思いながら私は  
お酒を抱きしめながら  
眠りについた

この素晴らしい世界の終わりと始まりを！

アクア「今年も今日で終わりね」

カズマ「そうだな」

王都で買い物を済ませ、テレポートで街に戻った帰り

俺達は雑談しながら屋敷に向かっている

アクア「それにしても、こんな寒い時に私を連れ出して荷物持ちさせるなんてカズマ、リーダーのことじやないと思うんですけど

」

カズマ「年越しそば食べたいなんて言つた奴に言われたくねえよ。そもそも俺が買い物しに行く理由を作つたのは、お前が原因だらうが」

アクア「だつて、日本人と言つたら年越しそばを食べるものでしょ」

カズマ「お前は日本担当の女神であつても日本人ではないだろ」

こいつが今朝年越しそば食べたいなんてワガママ言うから王都まで材料調達しなきやいけなくなつたんだがわかつているのかこいつは

カズマ「とにかく、帰つたら年越しそばを作るからお前も手伝えよ」  
アクア「えく、カズマさんが一人で作つてくれるんじゃないのく？」

カズマ「俺としては手伝ってくれない方が助かるんだけどな、一人分作らないだけでも楽だからな」

アクア「ああ！手伝います！手伝いますから、私にも年越しそば作つてください！」

そんなこんなで俺達は屋敷に帰つた

カズマ「アクア、そこの包丁取ってくれ」

アクア「はい」

屋敷に帰つた俺達は早速年越しそば作りを始めている

元々年越しそばどころかそばの作り方さえ知らないのに作れるようになつたのは料理スキルのおかげだな

こういう所で偉大だと感じる

ちなみにダクネスとめぐみんは実家に昨日から帰つており、今日の夜までには帰つてくると言つていた

カズマ「こうして年越しそば作りをしていると、今年あつたことが頭に鮮明に浮かんでくるな」

アクア「そうね、私もダシ汁作りしていると思い浮かべるわ」

そう俺達は作業をしながら今年あつた事を思い浮かべた

(カズマ)魔王軍幹部と戦つたり、商品開発したり、国家転覆罪とか言われて裁判にかけられたり、あの豚領主にダクネス盗られて金ぶちまけたり、めぐみんが爆裂魔法で物を壊して謝罪に行つたり、アクアが問題起こしてその後始末したり、アクシズ教徒を再教育したり……(アクア) 借金たくさん作つたり、私が転生させた日本人が起動要塞作つてそれの処分をしたり、カズマに怒られたり、殺されかけたり、焼かれたり、カズマにアクシズ教を再教育させるか滅ぼされるか選べなんて脅されたり……

カズマ「……」

アクア「……」

カズマ「よし！忘れよう。今年あつた事は忘れて来年の事だけ考えよう！」

アクア「そ、そうね、そうしましよう！私もカズマさんにやられた

カズマ「（あれ？ろくな思い出がない!?）」  
アクア「（あれ？ろくな思い出がない!?）」  
カズマ「（ほんとが馬鹿共の後始末しかしていない!?）」  
アクア「（ろくな事しか無かつたけどほんとがカズマにやられた事ばかり!?）」  
カズマ「……」  
アクア「……」

事は忘れて来年の事だけ考えることにするわ!」

とにかく

来年の事だけを考えよう

俺達はそう心に決めたのだった

カズ・アク・めぐ・ダク 「「「いただきます!」」」  
年越しそばを作り終えた俺とアクアは  
実家から帰ってきたダクネスとめぐみんと一緒に年越しそばを食  
べ始めた

ダクネス 「ん、この年越しそばと言う料理は美味しいな」

めぐみん 「ええ、さつきまで外にいましたから身体の芯まで暖まり  
ます」

カズマ 「そうかそうか、それはよかつた。アクアはどうか?」

アクア 「うん。初めて食べたけど美味しいわ」

カズマ 「え? お前食つたこと無かつたのにあんなこと言つたのか  
?」

アクア 「だつて食べてみたかつたんだもん」

こいつは……

まあいか

めぐみん達も美味そうに食ってるんだしな

もしかしてこいつ

めぐみん達にも年越しそばの初体験させたかつたんじや……

考え過ぎか

カズマ「こいつ食った後は酒を飲みながら今年が終わるのを待つだけだ」

めぐみん「カ、カズマ、私は……」

カズマ「ん、そうだな。いつもだつたら駄目だが、今日だけ特別に

飲んでいいぞ」

めぐみん「ほ、本当ですか!!」

カズマ「ただし、飲みすぎるなよ」

めぐみん「はい、分かつてます」

めぐみん「ん、お酒はこれくらいにしますか」

カズマ「お、自分で適量を判断できる辺りアクアとは違うな」

アクア「ちょっとー、それどうゆうこと!」

ダクネス「アクアは普段、『このくらいで』って判断できなくて酔いつぶれているではないか。カズマはその事を言っているんだろう」

カズマ「そういうこと」

アクア「う……」

めぐみん「実は一つだけ、安心している事があるんですよ」

カズマ「ん?なんだそれ?」

めぐみん「ゆんゆん……いるじゃないですか。ゆんゆんは見てわかる通り、普段からボツチですから年末とかは実家に帰るしか無かつたんですが……」

カズマ「ああ、あいつ今はティラーラー達のパーティに入つたから」  
めぐみん「はい。ですから今年は年末ボツチにはならずすんで安心してるんです」

カズマ「お前は…普段あいつにやたら厳しいこと言つてる割にはあいつの事気にかけるんだな」

アクア「アレよカズマ、めぐみんって、たまにツンデレになるじゃない。それをゆんゆん相手にそう接しているのよ」

めぐみん「な!そ、そうじゃなくて…」

ダクネス「まあまあふたりとも、めぐみんの反応を楽しむな」  
めぐみん「え?ダクネス、ふたりは私の反応を見て楽しもうとしてたんですねか!?」

ダクネス「ああ、もつと言うと私も楽しもうとしていたんだが」

めぐみん「あなた達は!!」

カズ・アク・ダク「[[ハハハハハハ!!]]」

カズマ「3・2・1」

アク・めぐ・ダク「[[ハッピーニューカイヤー]]」

カズマ「いや～これで新しい年を迎えることが出来たな」  
めぐみん「はい。とりあえず今年の目標は」

カズマ「『田指せ爆裂魔法1000発！』とかか？」

めぐみん「……」

カズマ「分かりやすい奴」

ダクネス「わ、私の目標は（カズマ）『素手で一撃熊を引き裂くか』  
か、勝手に決めるな!!」

アクア「ちなみに私の目標は（カズマ）『却下で』なんでよおおおお  
おおお!!」

……い…………きろ…………お…………ア…………ア

お…………おい…………起きろ！アクア!!

アクア「ふえ？」

カズマ「やつと起きたか」

アクア「え？力、カズマあ～？なんで私の部屋にいるの？はつ！も、  
もしかして！し、新年早々私の事お」

カズマ「おい、それ以上言うと屋根から落とすぞ。まだ寝ぼけてる  
のか」

アクア「え？屋…根？あ!!」

アクアは驚いたように辺りを見渡す

周りはまだ暗く少し肌寒い

そう

俺達は今屋敷の屋根の上にいる

アクア「え、ええ!? な、なんで私、屋根の上に…」

カズマ「おい、お前寝る前俺に言つたこと忘れてないか?」

新年を迎えた後、俺達は直ぐに眠りについた

寝る前にアクアが

アクア「私ね、初日の出が見たいの。だからねカズマさん、私より先に起きたら私の部屋に来て私を起こしてくれない?」

そうお願ひされたんだがこいつは全然起きないから止む終えず屋根まで担いで登つた

アクア「あ、そうだつたわ。昨日寝る前だつたらちゃんと記憶に残つてなかつたのよ」

この鶏頭が

カズマ「はあ…全く」

アクア「ねえカズマ…出来ればだけど…今年は去年みたいに過ごせないかなあ」

カズマ「去年みたいについて…お前またあの苦労を背負いたいのか

?」

アクア「そ、そうじやなくてね…去年は大変だつたけど…それ以上に楽しい事も…嬉しい事もあつたじやない…そういうことがあるとね…あんなに苦労しても…全部乗り越えきれるつて思つちやうの…」

カズマ「乗り越えきれる……か」

確かにこいつの言うとおりかもしれないな

大変だが…乗り越えのは俺一人じゃない…アクアやめぐみん…ダクネスもいる

この先もこれからも…こいつらが一緒にいれば…乗り越えれない困難はない…そう思いたい

アクア「あ、カズマカズマ!!」

アクアが俺を呼び前に指をさす

指した先には

太陽が……初日の出が登つてきている  
この世界に来て初めて見る初日の出だ

アクア「カズマカズマ」

カズマ「うん?」

アクア「今年も面倒をかけると思うけど……よろしくね」

カズマ「……フツ・しようがないな」

## 蟹漁とアンデットホイホイ

アクア「ああ！ 来てる来てる！ 『アンデットホエール』が来てるわ  
！！ カズマさんどうにかして!!」

カズマ「うるさいー・こつちは取り巻きの『アンデットフイツシユ』の  
相手で忙しいんだよ！」

漁師「クソ！ どうなつてんだ!! 海に出て、アンデットとは、何度か  
遭遇したことはあるが、こんな数で来ることなんて無かつたぞ!!」

俺達の乗っている船の持ちである、漁師が話しながら船に突っ込んで  
来ようとしてるアンデットフイツシユの相手をしている

カズマ「ああクソ!! なんでこうなつたんだあああああ!!」

俺は海に出るまでの事を思い返した

カズマ「ああ、美味かつた」

めぐみん「本当、美味しかつたですね」

ダクネス「高い食材はあらかた食べた私だが、これは本当にいつ食  
べても美味しいな」

アクア「流石は霜降り赤蟹ね。高級食材なだけあるわ」

俺達は晩ごはんに、以前ダクネスの実家から送られてきた霜降り赤  
蟹を食べていた

その旨さと言つたら、地球の蟹を上回るくらいに旨いな

カズマ「けど食い足りないな。まだ食いたかつたなあ」

アクア「四人で食べるとそこまで食べられないからねえ」

めぐみん「私は実家が貧しくて食べれるだけで満足ですが……やっぱり食べ足りませんね」

ダクネス「まあ霜降り赤蟹じたいが高級食材で、市場にもあまり出てこないからな」

カズマ「うーん、けどまだ食べたいなあー」

カズマ「と言う訳で蟹漁行くか」

アク・めぐ・ダク「二行動力がすごい!!」

翌日、朝食を食べ終えた俺はアクア達の前で蟹漁宣言をした

ダクネス「まさか蟹が食べたいからと言つて」

めぐみん「翌日に蟹漁に行こうと考えて動くとは」

アクア「蟹漁大変なのにね」

行動力がすごいって、単に海まで行つて船に乗つて蟹漁をするだけなのにそんなに大変か?

カズマ「じゃあ準備したら行くか」

ダクネス「あ、今日は実家に用事があるからすまないが私は行けない…」

めぐみん「私はゆんゆんと約束があるので…」

む、ふたりは予定があるのか

なら仕方ないな

なら後は

カズマ「アクア（アクア）「嫌よ」……まだ何も言ってねえよ」

ある程度予想はしていたがやはりか

アクア「言われなくとも分かるわよ。私も行けっていうんでしょ？嫌に決まっているでしょ！だいたい蟹漁がどれだけめんど（カチャ）……え？」

俺は、話しているアクアを無視してアクアの両手を掴むと手錠を掛けた

アクア「え？ええ！」

カズマ「悪いがお前に関しては拒否権はない。お前にはこのまま連行してもらう」

アクア「い、嫌よ！だいたい手錠なんてどこで仕入れて来たのよ！」

カズマ「んなもん裏に決まつてんだろ？じやあ行くか」

アクア「い、嫌あああ！めぐみん！ダクネス！助けてえええ！」

めぐ・ダク 「グッドラック！アクア」

アクア「見捨てられたあああああ！」

こうして俺は喚くアクアを引きずりながら蟹漁の出来る海に向かった

必ず霜降り赤蟹を食うために

と意気込んでいたは良いものの

カズマ「海にまでアンデットが出てくるなんて聞いてないぞ！」

海についた俺達はまず、蟹漁をする漁師の元にいき、手伝うかわりに蟹を分ける事を条件に船に乗せてもらつたが

蟹が取れるポイントにつく頃には日は沈んでおり、そこから蟹漁を始めようとしたがそこに、海に生息するアンデット達に出食わし戦つている

カズマ「なんで海にアンデットがいるのか！？ふざけんな！」

アクア「カズマ、この世界では、死んだ生き物は時間が経つとアンデット化する。あの水中アンデット達は海で死んで、すぐに他の生き物に食べられなかつたからアンデット化してるのよ。昼間は日の光が届かない所まで潜つていて、夜になるとこうして出てくるわけ」

そういうことか

海も安全では無いわけか

だとしてもこの数は多すぎる

このままだと船が沈められてしまう

どうすれば

アクア「ああ!!私の周りだけ多すぎよおおおおお!!」

……そういえばこいつはアンデットが寄つてくる体質だつたの忘れてた

これは……連れてくる人選間違えたか

というか原因はこいつか！

アクア「も、もう怒つたわ!!覚悟なさい!」

おお、アクアのやつ淨化魔法を使う氣だな

というか、初めからさつきと出せ

アクア『セイクリッド・クリエイトウォーター』！

カズマ「そつちかよふざけんなあああああ！！」

カズマ「と言う事があつて蟹、取れませんでした」  
めぐ・ダク「災難（だつたな）でしたね」

アクアの起こした水が津波に変わつて、水中アンデットはどうにか  
できたものの船が沈みかけた

カズマ「ただ」

めぐ・ダク「？」

カズマ「こんな物が採れた」

俺は屋敷まで引いてきたリヤカーの上に被せてあるものを取つて、  
ふたりに見せる

めぐみん「え!？」

ダクネス「カ、カズマ！」、これつて、ま、まさか！」

カズマ「そのまさかだよ」

リヤカーの中には

でかいマグロが2匹置いてある

カズマ「こいつは『ブラックジユエルマグロ』だ」

ダクネス「ブラックジユエルマグロだと!?海で採れる食材の中では  
最高クラスの食材で王族ですら、滅多にお目にかかるないと言われて  
いる最高級の食材を採つたのか!?」

めぐみん「べ、別名『海の黒い宝玉』とも言わっていて、わずか1キロでも数百万はすると言われている物を2匹も!」

カズマ「いや、正確には3匹だ」

そもそも俺がマグロを探れたのはアクアが起こした津波のおかげだ

たまたま近くを通っていたマグロの群れが、アクアの津波に巻き込まれて、その波が船にぶつかった際に船の中に入ってきた

俺は船に乗せてくれた漁師に迷惑料としてマグロを1匹あげた漁師はものすごく喜んで、また乗せてくれるそうだ

ダクネス「だが、これだけの量、私達だけではとても食べ切れないんじや」

カズマ「ああ、分かつてる。だから」

カズマ「こいつらをさばいて料理を作つたら、ギルドでこれを食いながら宴会しようか。アクアには先にギルドに行つて、宴会会場を設けに行かせた」

ダクネス「……ずいぶんと贅沢な宴会になりそうだな」

めぐみん「ええ……まあ…私達が探つたわけでは無いので何も言いませんが」

カズマ「さて、さつさとさばくか」

その後俺は、宴会で出す用の料理を大量に作つて、ギルドに持つて行つて、大いに騒ぎながら飲み食いしまくつた

カズマ「(それにしても、二度とアクアとは海に行きたくねえな)」

その日出したマグロの料理でアクセルの冒険者達からの評価が大

きく上がつた

後日、あのマグロが1匹数億エリスで取引できた事を知り、ショックを受けるのだつた

# 4年に1度の幻の日!!ボツチの誕生日!!

カズマ・アクア・めぐみん・ダクネス・クリス・ウイズ・バニル・ダスト・キース・リーン・ティラー 「「「「「誕生日おめでとう!!!」」」」」」」

ゆんゆん「……ふえ?…」

ある日の夕方

ゆんゆんに俺達パーティの住んでる屋敷に食事に来るよう言つた

ゆんゆんは誘われた事自体に驚き、何度も誘い間違いじゃないですよねと聞いてきた

その言動から察するに、誰かとともに食事を一緒に食べる事がなかつたんだなあと思わず泣きそうになつた

そしてゆんゆんが屋敷に来る当日

ゆんゆんが屋敷の扉を開いた先にいたのは、この屋敷の住人でいる俺達のパーティといつも街で世話になつてゐるクリスとウイズとバニルに、自分の所属パーティであるティラー達がいた

俺達がゆんゆんに誕生日おめでとうと言つた通り、今日はゆんゆんの誕生日だ

ゆんゆんの誕生日はめぐみんから教えてもらつた

その誕生日の日を聞いた時は俺達は思わず可愛そだと思つたなぜならゆんゆんの誕生日の日は

俺がいた地球で言う所の2月29日

そう、4年に一度のうるう年にだけある2月の29番目の日に当たるのだという

つまりゆんゆんだけは今まで生きてきて誕生日を今日を含めて4回しか迎えてないという

そのくせ歳だけは増えていくからなんだか納得行かないと感じるゆんゆん「…………え…………えつ…と…皆さん…………き、今日は嘘をついてもいい日でしたつけ?…」

カズマ「いやエイブルフルはまだ先だろ!お前好魔族の中では

めぐみんの次に賢いのに自分の誕生日を忘れてしまったのかよ」

多分忘れてないだろうが、今までまともに祝われた事がないから疑つたんだろうな

どんだけこいつはボツチこじらせてるんだ

ゆんゆん「う……ううあ……ううつ……」

突然ゆんゆんが泣き出した

ダスト「おい、どうしたゆんゆん」

と、ティラーパーティの中で一番ゆんゆんに絡んでいて俺の中ではこのふたりはお似合いのカップルになるなど日々思わせるダストがゆんゆんに近づいて声をかける

ゆんゆん「ダ……ダストさん……ヒック……今まで……家族以外に誕生日を祝われた事が無かつた私が……こんな大勢に祝われるなんて……こんなに嬉しい事は……ありませんよ……ふぐつ……私……明日には死んでしまうんでしょうか……もし明日……本当に死ぬ事になつて地獄に堕ちた……としても……後悔はありません……」

めぐみん「縁起の悪い事言わないで下さいよ!!これだからボツチは

⋮

ゆんゆん「め……めぐみん」そ……こんな日にホツチとか言わないでよ  
！」

ゆんゆんには悪いが俺もめぐみんと同じ気持ちだ

というか誕生日祝われただけでここまでという事は、プロポーズとかされればショック死不可避だろ

クリス「落ち着いてゆんゆん、心配せずともゆんゆんは死なないし死んだとしてもエリス様がきちんと天国に連れてつてくれるからね」  
バニル「フン、天国などとインチキ臭い場所にボツチ娘を連れて行かせるものか……よいか、死んだら地獄に来るのが吉、汝は我輩の友だから特別待遇してやるから是非来るがいい」

クリス「あのね、本当は悪魔の君はこんな所に来て欲しくないしほければ滅して欲しいんだけど今日は友達の誕生日の手前、見逃してあげることを理解してくれると助かるんだけど（イラ）」

バニル「おやおや胸のサイズを誤魔化しているインチキ女神を信仰

している男と思われる盜賊娘よ、汝がどれだけの強者だろうと我輩を滅ぼすことはインチキ女神の胸が成長するより困難である事を理解するおつと、無言でダガーで斬りかかってくるとはこれだから狂犬女神共を崇める教徒共は野蛮で嫌なのだ

クリス「ねえ、今日、ここで君の命日にしてあげてもいいんだよ？君さえ良ければだけど」

めぐみん「ふたりとも！ここで喧嘩はしないで下さい！喧嘩するにしてもせめて今日ではなく明日にして下さい！」

めぐみんの言葉にふたりは向かい合うと

バニル「……爆裂娘に救われたな」

クリス「それはこっちのセリフだよ」

お互い睨み合っているもののそれ以上の干渉は無かつた

カズマ「あー、とにかく今日はゆんゆんの誕生日だ、酒も料理もたくさんある！ジャンジャン飲んで食つて騒げ！」

こうしてゆんゆんの誕生日が無事始めることができた

ゆんゆん「はあ～」

私は今カズマさん達が住んでいる屋敷の庭に出ている

料理もたくさん食べて、今日は特別にお酒も飲んで少し気分が高揚

していた

少し風に当たりたくて外に出てきたのだけど

ゆんゆん「はあ、あ、こんなにも楽しい日なのに4年に1度だけなんて……」

私は自分の誕生日が嫌いだった

祝われる回数が少ない事もそうだが何より、家族以外の人に祝われる事がなかつたから

ダスト「ここにいたのか」

と、後ろからダストさんの声が聞こえた  
ふと振り返るとある事に気がついた

ゆんゆん「……ダストさん：あまりお酒飲んでないんですね」

いつもは酒を飲んで顔を赤くしているが今日は珍しく顔が赤くなつてない

そういうえば今日はお酒をチビチビと飲んでいた事を思い出した

ダスト「あーその、アレだ、酔いすぎて渡すもん渡すの忘れちまわ  
ない様にしてただけだ」

ゆんゆん「え？」

そう言つてダストさんはポケットからなにかを取り出した

ダスト「えつと……俺、女にプレゼントとか渡した事なかつたから  
何が良いのか分からなかつたが俺なりに考えたんだ：」

ダストさんの手には小さな包み紙に何かが巻かれていた

ゆんゆん「えつと、開けていいですか」

ダスト「あ、ああ」

私は包み紙を剥がして中を見た  
中身は

何かの動物の爪でできたネットクレスだつた

ゆんゆん「あの、これって」

ダスト「女に贈るものではないとは思うが、これはドラゴンの爪で作つたネットクレスだ」

ゆんゆん「ええ!!」

私は驚いた

それはそうだ

ドラゴンは全ての部位という部位が様々なものに使われなおかつ高い素材だ

それを万年金欠のダストさんがわたしに!?

ゆんゆん「ダストさん…………今ならまだ間に合います

……自首してください……」

ダスト「いや盗んでねえよ！お前もひでえな！」

私の言葉を聞いてダストさんが怒鳴り声を上げて私に言つてきた

ダスト「ちゃんと自分の金で買つたから安心しろ！」

ゆんゆん「あの……本当にこれ……盗難品では無いですね」

ダスト「お前もしつこいな！ちげえつて言つてんだろ！いつもはともかく仲間の誕生日に盗難品をプレゼントするほど落ちぶれてねえよ！」

ゆんゆん「今『いつも』は、つていいませんでしたか？」

ダスト「言つてねえよ」

言つたと思いますがそう言う事にしてあげますよ  
それにもしても

ネットクレスを眺めていた私は笑みを浮かべた

ダスト「なんだ？俺が眞面目にプレゼント渡したことがそんなにおかしいのか？」

ゆんゆん「い、いいえ、そんなんじやないです。ただ……」

ゆんゆん「私の為に、普段は不眞面目のダストさんが眞面目にプレゼントしてくれた事が嬉しくてつい……」

とそんなこと言つてすぐに恥ずかしい事を言つていると気づき顔を赤くしてしまった

私はチラツとダストさんの顔を見て驚いた

あのダストさんが顔を赤くして、ちらと目を合わせないようにしている

照れてるのね

ダスト「そ、 そ、 う、 か、 プレゼントは気に入つたのか…なら早く屋敷に戻つて思いつきり酒飲んでこねえとな」

ゆんゆん「あ、 待つて下さいダストさん！ お顔をもつと見せて下さい」

ダスト「だあーー！ うるせえー！ とにかく飲みまくつてやる！ 忘れるくらいにな！」

ゆんゆん「あー待つて下さい

私は逃げるよう屋敷に歩き出したダストさんを追いかけた  
そしてこの時私の心は、いつもとは違うドキドキ感を感じていた

一方2階のベランダから二人の様子を覗いていたカズマとアクア  
は

カズマ・アクア 「あのふたり、絶対くっつけさせよう（使命感）」

この皆に愛されし主人公に祝福を！

▣ある日の夜▣

アクア「カズマカズマ」

カズマ「ああ？何だ？」

アクア「明日暇？」

カズマ「暇つちやあ暇だがどうした急に？」

アクア「うん、あのね…明日私とデートしよ？」

カズマ「…はあ？」

カズマ「…眠れねええ…」

突然昨日アクアからデートの誘いが来てなんやかんやあつて結局承諾してしまった

人生初のデートのお誘い

だが相手はあのアクアだ

これまで女性と見た事はない奴からだ

なのに昨夜は全然眠れなかつた

相手がアレでも初デートって事で脳内がパニクつていたから眠れなかつた

しかもこのデートのまちあわせ時間も変わっていた

朝6時に屋敷の外でつて、普段寝坊ばつかしてゐるあいつが起きそ  
うにない時間帯だ

まああいつが6時に来るよう言つたからには6時に屋敷の外に  
居なきやいけない

約束の時間までまだ30分あるが全く眠れなかつたから約束の時  
間30分前だが外で待つとこうと思ひ外に出た

カズマ「はあ…」

アクア「何よ、ため息なんてついて」

カズマ「いや、俺にとつては人生初のデートなんだが、その相手がお前だということにな」

アクア「はあ!? 何文句言つてんのよ! 私だつて初デートなのに相手がアンタつて事に色々言いたい事があるのに我慢してんだから文句言うんじゃないわよ!」

カズマ「言つてんじやねえか! やっぱやめるか」

アクア「駄目よ! これは決定事項よちなみにどこに行くかは私がもう決めたから」

カズマ「初<sup>ジ</sup>デートでアクアにリードされんのかよ」

アクア「とにかく行くわよ!」

アクア「さあ着いたわカズマ! 早速<sup>ジ</sup>デートに」

カズマ「帰<sup>ス</sup>させて頂<sup>ク</sup>きます!!」カズマは逃げ出した

アクア「待ちなさい!」だが回り込まれた

俺はアクアに連れられてテレポート屋に来た

行き先は秘密と言わされたが、この時点で俺は嫌な予感がしたが、アクアが強引に連れて行こうとしてそれについてのつてしまつた  
だがその行き先は

カズマ「何で初デート先がアルカンレティアなんだよ!!俺への嫌がらせか!?それともこの間俺が言つてた通りアクシズ教徒を滅ぼしても言いのか!?」

アクア「良くないに決まつてんじやないの!それと安心して、今日だけアルカンレティア全体にいるアクシズ教徒全域に渡つて勧誘活動と問題を起こす事は絶対に禁止にしてるから、それとアルカンレティアにいるアクシズ教徒は今日だけカズマの言う事に従う事になつてるから…」

へえ…、今日だけ…

ああ、そういう事ね

なら乗つてやるか

カズマ「…分かつた、ただし…一度でも問題を起こしたりしたら速攻でアクセルに帰るからな」

俺はそう念押ししてアクアと一緒にアルカンレティアをまわつた

アクア「どうカズマ、アルカンレティアをあちこち見て回つた感想は?」

カズマ「…正直普段からこうだつたらなあつて思つた。一応この世界をあちこちの街を見て回つた中でアルカンレティアは特に綺麗な所だとは思つていたがお前の教徒のせいで色々台無しになつた

からな」

アクアと共にアルカンレティアを回るデートをしてかれこれ数時間が経つたまだまだ回つてないところはあるが

それなりに楽しんだ

そして驚くぐらいにアルカンレティア中にいるアクシズ教徒達は全く勧誘活動や問題を起こしてない

普段からこれなら信者も少しは増えるだろうに

カズマ「つと、そろそろ腹が減ってきたな」

アクア「だつたらあそここのカフェで昼食にしましょ。私奢るから」

カズマ「いや待て、普通逆じやねえか。というか今日やたらお前にリードひかれてんだが：」

アクア「いいから、早く行きましょよ」

やれやれ

俺の初デートは、女子にリードひかれんのか

アクア「ううん、美味しかつたわねさつきのカフェで食べたクラブサンドは」

カズマ「確かに美味かつたが……なんか俺のだけ多くなかつたか？」

アクア「サービスでしょ……それよりカズマ、だいぶ汗かいたんじやないかしら」

カズマ「ああ…あれだけ歩き回ればな」

アクア「だつたら、あそこの温泉に入つて汗流しましようよ」

カズマ「そうするか」

確かあの温泉でハンスとあのお姉さんが話ていた混浴があるんだつたよなあ

カズマ「ふう、いい湯だなあ」

アクア「そうね、でも私が入つたらただの湯になるのよね…」

カズマ「出ろやバーか」

俺とアクアはアルカンレティアにある温泉に入つてゐる

そして俺の隣でアクアも入つてゐる

異性同士で入つてゐると言う事はここは混浴だということが分かる

なぜ俺とアクアが混浴に入つてゐるのかは至つて単純な理由だ

女湯も男湯も、どちらも立ち入り禁止になつてゐる

残つたのは混浴だけなんだが入り口に『本日のみサトウカズマ様と  
アクア様専用』と書かれた立て札があつた

色々ツッコミたいとこだつたが、温泉に入りたい気持ちが優先して  
しまつて俺達は入つた

当然アクアはタオルを巻いていて俺の正面には立たないようにして  
いる

あとさつきアクアが背中洗うとか言つて背中を洗つてもらつた

……今日のアクアはリードを引くだけでなく尽くしてくるな

アクア「カズマ…はい」

アクアはどこからか酒と酒用の木の器を二つ持つてゐた

そのうちの一つを俺に渡してた

カズマ「ありがとよ……温泉に入つて酒飲むの、一度やつてみた

かつたんだよなあ

アクア「フフツ分かるわ。私も天界の上から日本を見ていた時何度もやつてみたいって思つていたんだもん」

カズマ「日本で思い出したんだが……アクア、お前つて『三保の松原』って知つてるか？」

アクア「ああ……知つてるけどそれがどうかしたの？」

カズマ「いやな、ガキの頃親から聞かされて、日本にいた時は迷信だと思つたが、お前に会つて実話だつたんじやねえかつて思うようになつたからさ」

アクア「あれは実話よ……だつてその天女つて私だもの」

カズマ「はあ？」

アクア「ええつと、あれは確か……いつもみたく天界から下界の日本を見ていた時なんだけどね、その時羽衣落としちやつて急いで降りて取ろうとしたら丁度その時、地上の漁師に取られちゃつて返してくれないか言つたら天上の舞を見せたら返すつて言つたから、ダンスを見せたわ。そしたら返してくれておかげで帰れたわ。一応無くとも帰れはするけど女神の証である羽衣を地上に落として無くしたら色々まずいことになるから助かつたわけ。あとそれから時々羽衣を地上にわざと落として拾いに行くふりして地上を堪能したわ。ただいつの間にか伝説になつちやつたけど」

カズマ「……知りたくなかつたその事実。ちなみにその時の格好は」

アクア「今と一緒よ？」

俺が聞いた伝説に伝わる格好も見た目も、長い時をえて随分変わつたな

柄の悪い冒険者「オラオラ！どうしたお前ら！今日はいつもみたい  
な狂気的な宗教活動しないんだな!!」

柄の悪い冒険者2 「日頃の恨みをここで晴らしてやんぜ！」

温泉から出た俺達が見たのは

柄の悪そうな冒険者2名が周りでおとなしくしているアクシズ教  
徒達に威張り散らし、暴言を吐いている

更に

柄の悪い冒険者「オラ！これは俺達に散々しつこく勧誘活動してき  
た罰だ！」

そう言つて一軒の店の前にある野菜の入ったカゴを蹴り飛ばす  
あいつらも色々ここアクシズ教徒達にやられた鬱憤が溜まつて  
んだろうが、やりすぎないか少し不安になる

そしてそういう輩に対しても周りのアクシズ教徒達は決して騒が  
ずにいる

それに調子乗つたのか

柄の悪い冒険者2 「オラ！散々そのエロい体を見せつけてきながら  
勧誘活動してきたそこの姉ちゃんも今日は無抵抗なんだな！」

その冒険者は近くにいるプロポーションのいいアクシズ教徒の女  
性の尻を揉んだ

これは止めたほうがいいか

アクシズ教徒の少女「止めて！お姉ちゃんに触らないで！」

そこに、いつかダクネスに入信書をビリビリにされたアクシズ教徒  
の少女が止めに入つた

というか姉妹なんだな

柄の悪い冒険者「あッ？ 邪魔すんじやねえよこのクソガキが！」

そう言つて柄の悪い冒険者はなんと

アクシズ教徒の少女「アアツ！」

その少女を蹴り飛ばした

カズマ「！」

俺は気がついたら

口調こそ穏やかでも

俺の内心は物凄く怒っていた

柄の悪い冒険者「グハアアツ!!」

少女を蹴り飛ばした冒険者を殴り飛ばしていた

柄の悪い冒険者2「て、てめえ！何しやがる！」

カズマ「……何しやがる……か……それはこつちのセリフだ。……ま

だ十にも満たない子供を蹴り飛ばすとは……お前らこそなんだ？」

カズマ「黙れ……どんな理由が有ろうと、ガキに暴力を振るやつは絶

対許さん」

柄の悪い冒険者2「だ、黙れ！日頃から散々目障りな事ばっかして  
くるこいつらに仕返ししてやる絶好のチャンスだつたからそうした  
だけだ。そこのガキはそれの邪魔をしてきたから蹴ったまでだ」

カズマ「黙れ……どんな理由が有ろうと、ガキに暴力を振るやつは絶

柄の悪い冒険者「う、うるせえ！俺達の邪魔すんじやねえ！」

カズマ「……一度だけチャンスをやる。その子に謝れ。そしてさつ  
さとこの街から出てけ」

柄の悪い冒険者「黙れ！誰か謝るか！こうなつたら俺らふたりでお

前をボコボコにして ya」

カズマ「そうか…残念だ」

俺はすうーと息を吸い込み

カズマ「アルカンレティアにいるアクシズ教徒達！こいつらを捕らえろ！」

大声でそう言つた

すると周りからぞろぞろとアクシズ教徒達が出て来て冒険者2名を捕らえた

柄の悪い冒険者「な！何しやがる!!離しやがれ!!」

カズマ「……こいつらを教会に連れて行つてアクシズ教徒になるよう調…洗礼をやれ、俺が許す」

そう言うとアクシズ教徒達は2名の冒険者を連れてアクシズ教会に連行して行つた

柄の悪い冒険者「ま、待つてくれた、頼む!!助けてくれ！」

柄の悪い冒険者2「お、俺達が悪かった!!だから止めてくれ!!」

カズマ「……だから一度だけチヤンスをやるつて言つたのにな…」

結局ふたりは連行された

カズマ「アクア…その子の怪我は？」

アクア「大丈夫よ…怪我は大したことないし、回復魔法掛けといったから」

そう言つてアクアは少女を立たせた

プロポーションの良いアクシズ教徒「あ、あの…」

さつきあの柄の悪い冒険者に尻を揉まれたアクシズ教徒が来て

プロポーションの良いアクシズ教徒「さつきは…私と妹を助けて頂いて、ありがとうございました！」

アクシズ教徒の少女「お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとうございました！」

礼を言われた俺達は礼はいいといつてその場を去つた

アクア 「……」

カズマ 「……」

結局あの後何事もなくデートを続けた俺達は  
アクセルに帰ってきた

たださつきからアクアが黙りこくつていた  
どうしたんだ

アクア 「ごめんね」

カズマ 「あん？」

突然アクアに謝られた

アクア「……せつかくの初デートに…あんな面倒なことに巻き込んで…」

カズマ 「別に…お前が謝ることじゃねえだろ？」

アクア 「ううん…私がデート先をアルカンレティアにしたから、  
あんな面倒なことにカズマが巻き込んじゃつたから…」

どうやらさつきの事を気にしていたようだ

アクア「……今日だけはカズマには…面倒事には巻き込まれないよ  
うにしたかったのに失敗しちゃつた…」

結構落ち込んでんな

気にしてない…そう言おうとした

アクア「カズマの初デート……楽しくしたかったのに…失敗しちゃつた……やっぱり…私が相手じゃなかつたら…」

カズマ「…」

俺は無言でアクアの頭を軽く小突く

アクア「ツ！」

カズマ「自分からデート誘つちやつて、何言つちやてんの…失敗なんかじやない…少なくとも俺は乐しかつた…初デートの相手がお前だつて思つた時は気分が萎えたけど…デートしてみたら思いのほか乐しかつた

だから…初デートの相手がアクア…」

カズマ「お前だつていうのも…案外悪くなかったよ」

俺は笑みを浮かべてそう言つた

アクア「！」

アクアは驚いた様子だつたがやがて…アクアも笑みを浮かべた

カズマ「それはそうと…俺を今日デートに誘つたのは……今日が俺の誕生日だから…準備の間…外に連れ出すためのものだろ?…後、デートの最中色々俺に尽くしてきたのも、誕生日だからだろ?」

アクア「やつぱりバレちゃつてたか…ええそうよ。でもね…最初はそのためだつたけどね…私も楽しんじゃつてたわ!」

アクアが笑顔でそう言つてきた

カズマ「…なあアクア…」

アクア「なあに?」

カズマ「今日のデート…本当に乐しかつた…けど今日はずっとお前にリードをひかれてたからどこか満足してねえんだよ。だからさ

⋮

カズマ「またデートする時は、俺がリードをひくからな」  
そう俺が言うとアクアは…キヨトンとした顔から急に笑いだした  
アクア「アツハハハ何それ！デートのお誘いのつもりハツハハハ  
ハハハ!!」

ひとしきり笑った後  
アクア「でもそうね……色々奢るならまたデートしてあげるわ！」

そういつた

カズマ「へいへい」

いつの間にか俺達は屋敷の前に来ていた

アクア「あつ！ そうだこれ！ はい」

そう言つてアクアが俺に布に包んだものを渡してきた

俺はその布をめくつてみた

中には

水色と緑色の星の形をしたお守りが入つていた

アクア「カズマが私の誕生日の時……手作りのプレゼントを渡してきたから私も手作りのプレゼントを渡すことになったの……どう？」  
俺は笑みを浮かべると

カズマ「ありがとう……相棒」

そう言つて大事に懐にしまつた

そして屋敷の中に入つた瞬間

めぐ・ダク・ウイ・ダス・リー・キー・ティ・yun・クリ 「「「「「力

ズマ（さん）（君）！誕生日おめでとう！」」」」

中で待機していた俺の仲間達が祝いの言葉を投げてくる

アクア「ああ：私も言い忘れてたわ……」

アクア「誕生日おめでとう…カズマ…」

カズマ「ああ…ありがとうございます…皆…アクア」

この素晴らしい駄女神様に誕生会を！リメイク版



カズマ「はいめぐみん、ダクネス集合」

夕飯にはまだ早い時間帯

アクアが出掛けたのを見計らい

めぐみんとダクネスを居間に集めた

カズマ「集まつたな？……集めたのは他でもない。もうすぐアクアの奴の誕生日が……それでその話し合いをしようつて思つてな

めぐみん「え？もうすぐアクアの誕生日なんですか？」

ダクネス「アクアは言わなかつたから知らなかつたな」

カズマ「それでな、誕生日に出す料理やプレゼントをどうするか、お前らの意見を聞きたい…」

めぐみん「料理ですか……アクアはジヤイアントトードの唐揚げが好物でしたね……それと、私が作つたザリガニ料理もたくさん食べてましたね」

ダクネス「それと霜降り赤ガニに……後カズマの作つたチャーハンも好物だつたな」

カズマ「あいつよく食べるからな……それと酒……誕生日だから特別に高いシユワシユワでも用意するかな……」

めぐみん「あの……特別な日ですから私も飲んで」

カズマ「駄目」

めぐみん「ですよね…」

カズマ「と言いたい所だが……呑まれない程度なら許してやる」

めぐみん「ほ、本當ですか！やつたです！」

ダクネス「それで…誕生会には誰を呼ぶか……私はクリスを誘おうかと思う」

めぐみん「なら私はゆんゆんを……あの子、友達の誕生日会に呼ばれる機会が片手で数えられるくらいでしたから必ず来ますよ…」

カズマ「俺はゆんゆんを誘うならダスト達も一緒だな、それにウイ

ズとバニルは……喧嘩になるだろうからウイズだけにしようか」

話し合いは実に順調に進んだ

あんまり時間掛けてたらあいつが帰つてきちまうから急ごう

カズマ「後はプレゼントか……」

ダクネス「プレゼント……アクアが喜びそうな物と言つたら」

めぐみん「お酒…」

ダクネス「変わった石」

めぐみん「宴会芸の小道具」

……改めて思うが、酒はともかく他の2つにも喜びそうな物はどれも女  
ていつたい

ダクネス「……なんというか……アクアが喜びそうな物はどれも女  
らしくないな」

めぐみん「アクアですしね…」

その納得の仕方は酷えな

この場にいなアクリアを不憫に思う

カズマ「お前らさ……なんか勘違いしてねえか？」

めぐみん「勘違い…ですか？」

カズマ「ああ……時にお前らはさ……貰うプレゼントに希望とかあ  
るか？」

めぐみん「そうですね……私は爆裂魔法をより大きく、より強く擊  
てる様になりたいですから、爆発系統の魔法の威力をあげる杖……い  
えそれよりもダイナマイトや爆発系のポーションでも……ああ！で  
も爆裂魔法を何度も撃てるようマナタイトというのも捨てがたいで  
すね…」

ダクネス「わ、私は……可愛い縫いぐる……いや何でもない……もつ  
とモンスターの攻撃をうけても耐えられるような頑丈の鎧を……頑  
丈ということは、攻撃をいくら受けても平気というから攻撃を受ける  
大義名分が……ハア…ハア…」

カズマ「オーケー分かった、お前にプレゼントの希望を聞いた俺  
がバカだつたわ…」

お前らの喜ぶ物だつて、ダクネスの言いかけたヌイグルミ以外は女

子らしさのかけらもねえな

途中から性癖出してる奴も居るしな（それは無論ダクネス）

カズマ「それじゃあ逆に……それ以外のプレゼントを貰つても嬉しいのか？」

めぐみん「いえ、そういう訳では……ただ気持ちのこもった物を貰うのは嬉しい……あ！」

ダクネス「余程困つたものでは無ければ……あ！」

どうやらふたりとも気づいたみたいだな

カズマ「そ……大事なのはあげる側がもらう側に何を贈ろうが、気持ちをこもった物あげること……そもそもプレゼントって言うのは、有形無形に関係なしに、相手に気持ちを贈る物のことを言うんだ」  
て、日本にいた時に読んでた本に書いてあつた事をそのまま言つた  
めぐみん「そうですか……それなら当口までに決めておきます」

ダクネス「ああ、私もそうする」

じゃあこれで終わりか

そう思つていると

アクア「ただまー」

まるで狙つっていたかの様に、女の子らしさの無い認定されてる奴が  
帰つてきた

カズマ「おかえり、今から丁度晩飯の用意をしようと思った所だ」  
アクア「あ、それなら今日鍋にしようよね……またエリス教徒に嫌  
がらせをしていたアクシズ教徒を止めていたらお礼に鍋に使えるお  
野菜貰つてきちゃつたわ」

マジでなにしてんの

お前の信者は……だから人類と魔王軍の第一の敵なんて言われん  
だよ

カズマ「……そのうち滅ぼそうかな…」

アクア「それはやめて頂戴…」

まあアクシズ教徒が一人も居なくなれば、信仰心が力の元になつて  
いる神……この場合はアクアの力が弱体化するし、最悪この世界から  
存在が消えてしまうかもしないからな

カズマ「……」

俺はアクアの顔をじっと見た  
もうすこして……

アクア「うーん? どうしたの、私の顔なんて見て」

カズマ「いや、ダクネスとめぐみんの言うとおり女らしくないのか  
なあつて思つてな」

アクア「なんですつて! めぐみん! ダクネス! そんなこと言つたの

!?

めぐみん「ご、誤解ですよアクア!」

ダクネス「そうだ! 私達はただ、アクアの好きそうなものが皆女ら  
しくないと言つただけで……」

アクア「それ言つてるようなものじやない!」

めぐみん「ちよつとカズマ! 余計な事を言わないのでくださいって、  
耳ふさいで台所に逃げないで下さい! ちよつ! カズマ! カズマああ  
ああああああああ……!」

俺は耳を塞ぎながら今晚の晩飯を作ろうとしていた

【数日後】

アクア「……ふえ……ここは…」

私は気がついたら、自分の部屋にいた  
窓を見ると外はもう夜だつた  
えつと……たしか…

カズマが部屋に呼んで、寝ろとか言つてきて

私が アクア『カ、カズマ！あ、あんた！私が眠かせて人には言え  
ないことをするつもりね！エロ同人みたいに！』

て言つたらカズマが恐ろしく早い手刀をしてそこで…

アクア「！」

私は驚いて体中を触つた…幸いなにかされた形跡がなかつた事に  
安心した

アクア「何よカズマめ！…必ず仕返ししてやるから覚悟なさい！」

そう言つて私は部屋を出て1階に降りた

カズ・めぐ・ダク 「「おめでとう (バ)ざいます) !!!」「パーンパー  
ン（クラツカーオン）

クリ・ウイ「おめでとう (バ)ざいます) !!」

ダス・キー・ティ・リー・ゆん 「「「おめでとう (バ)ざいます) !!!!」「」

ふえ…?

あれ…今日つて何かの記念日だつたかしら…

1階に降りたらカズマ達が私におめでとうと言つてきた

あるとすれば今日は…

めぐみん「アクア、お誕生日おめでとうございます」

アクア「へ？」

誕生日…私の？

ダクネス「カズマから聞いたぞ。今日が誕生日だつたんだな。何だ、全然言わないからカズマが言うまでアクアには誕生日がないかと思つたぞ」

キース「まあ俺達はカズマに誘われて来たわけだが」

ダスト「ちゃんと祝うぞ」

リーン「後日頃のお礼も兼ねてね」

ティラー「今日は呼んでありがとな」

ウイズ「アクア様、おめでとうございます」

アクア「えつと……」ポリポリ（頬をかく）

クリス「ちょっとゆんゆん、そう固くならないでよ」

ゆんゆん「だ、だつて、……、お、お友達の誕生日会に、……よ……、

呼ばれるだけじゃなく……、こうして、参加も……で……、でき

る……なんて……」

めぐみん「ゆんゆん、ボツチが出てますよ」

……

こういう時どうすればいいか私分かるわ

アクア「もう!とにかく楽しんじゃえ!!」

そう言つて私はお酒の入つたグラスを持った

うんうん、楽しんでるみたいだな

アクア「ん、美味しい。出されてる料理皆好物の物ばかりで幸せ♡」

カズマ「お前：分かつて いたが、よく食うな」

ウイズ「あ、あのアクア様」

アクア「ふゞ」？

料理を食べていたアクアにウイズが近づく

ウイズ「お誕生日おめでとうゞぎいます。これ……私からのプレゼントです」

そう言つてウイズは包装紙を巻いたプレゼントを渡した

アクア「あ、ありがとうウイズ。じゃあ開けるわね」

アクアがそう言つて包装紙を剥がすと中身は

銀色のブレスレットだった

アクア「うわ～、キレイ。本当にありがとうね」

ウイズ「いえ、喜んでもらえて良かったです」

カズマ「あれ？ウイズ、お前今週赤字つて言つてたけど、生活大丈夫か？」

ウイズ「だ、大丈夫です！当分砂糖水で生活すれば何とか生きられます」

カズマ「いや無理するな！」

プレゼントの為に生活が苦しくなるつて、もう少し自分の所持金考  
えてプレゼント選びしろ

アクア「と、とにかくありがとね（汗）。これほんと大事にするから  
ね」

自分の為に生活が苦しくなつた事への罪悪感とプレゼントを貰つ  
た事への感謝の念があるようで、苦笑いして受け取るアクア

ダスト「うんじやあ、次はこっちな」

ダストがそう言うと、包装紙に巻かれた酒をアクアに渡す

アクア「わあ、ありがとう。これで私のお酒のストックが増えるわ。

でもこれ高かつたんでしょう？」

ダスト「なあ、気にすんなって」

ダストがどうつてことないと言うが、後ろにいるダストのパーティメンバーがダストを睨んでる

ティ・キー・リー 「(調子のんな！カスが！)」「

後から聞いたが

プレゼントを買う金が無いバカの為にゆんゆんを除いた全員（ゆんゆんは別のプレゼントがある為）で金を出してプレゼントを買うこと

にしたらしい

なおそのバカはこのあとパーティーにボコボコにされたみたいだ

クリス「じゃあこれはあたしからアクアせ……、さんに」

一瞬先輩って、言おうとしたクリスもといエリス様はすぐに言い直し、包装紙に巻かれた箱をアクアに渡す

アクア「わあ、何が入つてんだろ」

アクアが楽しみとばかりに箱を開けると

アクア「……銀ナイフ？」

クリス「うん。あたしが普段使つてるダガーと同じく、エンチャントが出来て、女神エリス様の加護のお陰で持ち主の運気を上げてくれる代物何だ」

カズマ「運が絶望的に低いお前にはピッタリな代物じやん」

クリス「アクアさんって、そんなに運が悪いの？」

カズマ「悪いなんてもんじやねえぞ。よくダンジョン行くと俺達は罠に掛からないのにこいつだけ掛かつたり、2択でこいつが選んだ所だけ何かしらの不幸があつたり、限定販売してたケーキ、コイツの番になつた時には売り切れてたり、クエスト請けたら最低1回以上の不幸にあつたり、1人だけ爆発に巻き込まれたり、アンデット引き寄せ迷惑かけたり、他には」

めぐみん「カズマ、そのへんにしてあげて下さい」

めぐみんに止められアクアの方を見ると

アクアが床にうずくまつっていた

俺が言つてた自分の不幸を思い出して

心にグサグサきたんだろ

クリス「と、とにかくエリス様の加護が付いてるそのナイフが、ア

クアさんを守つてくれるよ」

アクア「ほんと? ク里斯ありがとうね」

少しば運氣が上<sup>あ</sup>がると聞いて嬉しそうに笑うアクア

カズマ「なあ、これ本当に効果あるのか?」

クリス「効果あるよ……多分」

多分さつき俺が言つてたアクアの不幸を聞いて

自信が持てなくなつた様だ

なおアクアの運氣は上<sup>あ</sup>がらなかつた模様

ゆんゆん「あ、あの、……ア…アクアさん…」アセアセ

めぐみん「ゆんゆん、落ち着いて下さい。ほら、一緒に渡しましょ

う」

緊張してゆんゆんと一緒にめぐみんが箱を渡してきた

アクアが、礼を言つて開けると中身は

アクア「アクセサリーだ。キレイ!」目がキラキラ▣

赤色の

いや、紅色をしたアクセサリーを持つてアクアの目がキラキラして  
いる

めぐみん「ゆんゆんと一緒に選びました。いつもアクアが使つてる杖につけると、魔法の効果が高まります」

装備品か

めぐみんが選ぶプレゼントにしてはまともだな

あ、ゆんゆんが一緒だからか

めぐみん「本当は爆発系のポーションをプレゼントしたかつたんで

すが、ゆんゆんに止められて」

ゆんゆん「当たり前でしょ! 誰しもめぐみん見たく爆発バカじやないのよ!」

ナイフだゆんゆん

略してナイゆん

てかめぐみんはなんでもものをプレゼントしようとしてた  
ダクネスが貰つても困らない物にしろつて言つたのに、危険物プレ  
ゼントするな！

気持ちが込もつた物なら爆薬でもいいってかあ  
ふざけんな！

ダクネス「では最後は私だな」

今まで会話に入つて来なかつたダクネスが、冬将軍の人形を持って  
きた……うつ……

ダクネス「これは、私からのプレゼントだ、受け取つてくれ」

アクア「ありがとうダクネス！……カズマ？」

冬将軍の人形を見て顔をしかめた俺に声を掛けてきた  
めぐみん「あ、そういうえばカズマ、昔冬将軍に殺されかけたこと  
がありましたね」

アクア「あ、だから顔色が悪くなつたのね」

カズマ「別に冬将軍が怖い訳じやない。ただ、……あの時は本当に  
殺されかけたから苦手意識が、おのれ冬将軍め……俺の心に傷をつけた  
恨みは、生涯かけてでも晴らしてやるからな……」

アクア「うーん、わかつては居たけどカズマは結構根に持つタイプ  
ね：無理はないけど……」

そんなこんなでアクアと軽く雑談しながらも、俺達は誕生日会を過  
ごしていく

カズマ「ううん、誕生日会は成功だつたな」

そう言つて腕を天井に伸ばして言つた

今俺は、自分の部屋にいる

あの後俺達はバースデーケーキを食べたり酒飲んだりして満喫していたが

誕生日会を初めて4時間経つ頃にはダスト達のパーティとウイズは帰つていった

片付けが凄く大変だつたが、クリスとゆんゆんも手伝つてくれたお陰で片付けが早く終わつた

ちなみにクリスとゆんゆんは屋敷に泊まると言う事で現在互いの親友の部屋に寝ている

カズマ「おつと、そういうえば俺、渡すの忘れてたな」

後でプレゼントを渡すつもりだつたのに忘れてた

仕方ない

明日にでも渡そうか

そう思つて寝る準備をしようとしたが

コンコン

カズマ「ん？」

俺の部屋のドアに誰かがノックしてきた

アクア「カズマ、今いい？」

アクアか

もう寝てる頃だと思つたが起きてたのか

カズマ「ああ、鍵開いてるから勝手に入れ」

俺がそう言うとアクアが部屋に入ってきた

カズマ「それで、……俺に何か用か？」

アクア「カズマ、……いろいろ言いたい事はあるけどまず私の質

間に答えてくれる?」

アクアが改まつた様子で俺に言つてきた

アクア「どうして、…………今日、…………私の誕生日会を、…………  
それ以前に、…………なんで今日が私の誕生日なの…………?」

アクアが恐る恐ると聞いてきた

カズマ「アクア、…………俺達が、この世界に来てしばらく経つた  
時の事覚えてるか?」

アクアの質問に俺は目をつむり  
あの日のことを思い出す

カズマ「ん？ なあアクア。お前の冒険者カードには、お前の誕生日  
が書かれてないんだが？」

アクア「ああ私、自分がいつ生まれたのか分からぬの」

カズマ「いつ生まれたのか分からぬって……そんな事があるのか  
？」

アクア「大体の神は、自分がいつ生まれたのか分からぬわよ。自  
然発生みたいに生まれるから」

カズマ「自然発生つて、……雑な生まれ方だな」

アクア「どうでも良いじやない。それより早くギルドにいきま  
しょ」

カズマ「あ、までつてアクア！…」

カズマ「あの時の俺は、そんなに深く考えなかつた。けどな、後になつて思つたんだ。お前みたいなバカでも誕生日がないのはなんか……、かわいそうだなあつて、思つてしまつたんだよ」

アクア「……」

アクアがした質問に俺は答える

アクアは黙つて聞いていた

カズマ「誕生日つて言うのは、そいつが生まれた事に感謝して、祝う日もある。お前にも、そんな日があつた方がいいつて、俺の勝手で決めた事だけだ」

アクア「……そう」

これまで俺の話を聞いていたアクアが返事をした

カズマ「今日をお前の誕生日にしたのは、俺にとつても特別な日だからな」

俺はしみじみとアクアに言つた

アクア「……それつて、……今日は、私とカズマがこの世界に來た日だから？」

カズマ「お前、覚えてたんだな。普段覚えてる事が苦手なお前が」

俺は少し苦笑して言つた

カズマ「お前の言うどおり、今日は俺とお前がこの世界に來て丁度1年たつた日。もつと言ふと、冒険者登録をして冒険者になつて、パーティを結成した日もある」

さらに俺は続ける

カズマ「今まで日本に住んでた俺と、今まで女神をやつてたお前に  
とつては、二度目の人生だ。俺は日本に居た時の記憶があるから、こ  
の世界での俺の誕生日は日本基準。誕生日が分からぬお前は、二度  
目の人生が始まつた1年前の今日つて事にした」

まあ、ちよつと誕生日の極め方が単純な気がするけどな  
アクア「カズマも、……祝いたかったの？……私が生まれた事に」  
カズマ「祝いたかつたつて、言うより俺は、お前にも誕生日があつ  
た方が良いつて思つただけだ。ただ、……まあ、少しは、……思つた  
けど」

少し恥ずかしいな

こんなこと言うのは

アクア「ふふつ」

カズマ「ふあつはははははははは」

カズマ「な、何がそんなに可笑しい！」

突然笑い出したアクアに思わず怒つた

アクア「だ、だつて、あれだけ建前言つといて、本音をボソつと言つ  
ちやうんだもん。ツンデレ！カズマのツンデレ！滅多に見れないか  
らかなりレアね！」

こいつ今すぐ3階の窓から突き落としてやろうか？

カズマ「ど、どうだつていいだろ、俺の本音なんて。それよりどう  
だつたか。初めての誕生日に誕生日会は」

アクア「うん、もうすつつつつづく楽しかつたわ！誕生日の人は

あんな感じで過ごすんだなつて、思つたわ」

カズマ「もう今からでも来年の誕生日が待ち遠しいだろ？」

アクア「うん！」

カズマ「そういだろ。誕生日が終わると来年が待ち遠しくなるのは誕  
生日あるあるだからな」

アクア「そりいえば今更だけど、なんで私を眠らせたの？」

カズマ「いやだつて当日、お前がでかけたら誕生日会の準備しよう  
と思つたのにお前が家に残るから無理やり眠らせてから準備を」  
アクア「だからつて、もうよつと他になかつたの！」

カズマ「いやほんとに悪かつたつて」

睡眠薬でも飲ませるべきだつたか？」

カズマ「ああそだ、忘れるとこだつた」

俺はそう言うと机に置いてあるプレゼントを卷いてある布を取る

カズマ「お前に渡すはずのプレゼント、渡すの忘れてたわ」

そう言つてアクアにプレゼントを巻いた布を渡す

アクア「カズマが、私に？」

カズマ「開けてみてくれ」

俺がそう言つてアクアは布を取る

アクア「……これ、髪飾り？」

アクアにあげたプレゼントは水色の羽衣を模した形をしている

カズマ「俺の手作りだ。気に入つてくれたか？」

柄にもなく手作りをプレゼントした

そもそも手作りのプレゼントなんて初めてだ

アクア「これ、……、手作りなの？」

カズマ「ああ、どうせプレゼントするなら、送る相手に気持ちを込めた物にしようつて、思つてな。気持ちを込めるつて言つたら手作りが一番だ」

よくもまあこんな恥ずかしい事普通に言えたな俺

カズマ「お前さ、女の子らしくないつて言われてたからこれ付けて、女の子らしくなれよな。つてあれ？」

アクアの方を見るとアクアがうつむいている

カズマ「どうしたアク……」

うつむくアクアに近づいて顔を見ると

アクア「うつ、ふつ、うぐつ、ううう」

アクアが泣いていた

カズマ「どうしたアクア。……もしかして、気に入らなかつたのか

?」

アクア「ふぐつ、違うの、ふつ、ひぐ、……カズマがくれた、ふぐつ、

プレゼントが、うつ、……、凄く、ひつ、嬉しくて、ううう、涙が、ひぐつ、止まらないの、：、あぐつ、「

どうやら俺があげたプレゼントを大変気に入つたようだ  
作つたかいがあつて良かつた

カズマ「落ち着いたか？」  
アクア「うん」  
しばらくアクアは泣いていたが泣き止んだ  
アクア「カズマ、ありがとうね。この髪飾り、大切にする」  
プレゼントにあげた髪飾りをつけてアクアが言う  
アクア「ど、どうかな？」

カズマ「ん、良いじやん、似合うよ、さすがは俺が作つた物だ」  
普段自画自賛なんかしないが  
自画自賛するくらい似合つてた  
アクア「あ、そうだ。ちょっと待つて」  
そう言うとアクアは部屋から出て行つた  
しばらくすると、アクアが戻つて來た  
片手には酒瓶を持つてた  
アクア「本当はね……今日、パーティを結成して1年が経つた記念日だから、皆でお酒飲もうつて思つてたけど、いろいろあつたから

すっかり忘れてたから……、今から飲もう」

そう言つて俺に湯呑を差し出して來た

カズマ「今からか？明日で良くないか？皆で飲むなら」

まあめぐみんはまだだめだが、特別に一杯くらいは飲ませても良いかも知れないと

アクア「いや、今飲みたいのよ、私は」

カズマ「そもそも今日はお前の誕生日って、事で飲んだからもういいんじやないか」

アクア「あれは私の誕生日って、事で飲んだ訳だから、パーティ結成記念日つて事で飲んだ訳じゃないからノーカンよ」

ただ飲みたいだけじやないか？」

俺はそう口にしようとした

アクア「それに……」

アクア「今は…………カズマと…………二人つきりで飲みたいの  
…………ダメ？」

カズマ「…………はあ…」

俺はアクアが差し出した湯呑を受け取ると

カズマ「さつきたくさん飲んだから、少しだけ飲むくらいで良いな  
ら…………飲んでやるよ」

酒瓶をとつて酒を入れる

アクア「ええ…………それでもいいから…………一緒に飲みましょう」

アクアが嬉しそうに笑う

はあ～

我ながら自分の甘さには呆れるな

こいつのこんな顔を見たらなんかもう、どうだつて良いって思つてしまふな

こんなの、ダクネス達に知られたら『カズマはアクアが好きなんだな』とか『やっぱりアクアが好きなのですね』とか言われるだろうな  
そういえばいつだつたかめぐみんに  
めぐみん『普段雑に扱いますが、なんやかんや言つて、カズマはアクアに甘いですね』

つて言われたな

俺はアクアの事を異性として意識してないんだけどな

だけど

俺はアクアの湯呑に酒を注ぎ

お互い湯呑を持つて

カズマ「じゃあ、アクアの誕生日改めパーティ結成記念日に」  
アクア「……乾杯……！」

俺はこいつのバカみたいに笑った顔が  
本当に

好きなんだよな

屋敷の中は静まり返り

屋敷の一室だけ明かりがついている

向かい合つたふたりの男女は、互いの湯呑を

力チン

ぶつけ、酒を飲む

湯呑をぶつけた事で出た音は  
暗く広い屋敷中に、広まつた

まだ今日は終わつてない

湯呑を持つて、酒を飲むふたりの男女は  
日付が変わつても、飲み続けるのだった

ねえカズマ

私ね…この世界に来て…色々なひどい目にもあつたし、死にかけた  
事もあつたわ

けどね、それ以上に楽しかったことや、うれしかった事もたくさん  
あつたわ

今日だつてそうよ

誕生日なんて…私には縁のないもの、なんて思つてたけど……この  
世界に来て

生まれて初めて自分の誕生日を迎えた事を

私は決して忘れないわ

アンタは

意地悪で鬼で容赦ない策士だけど……心の底は、誰よりも優しい男  
ね：

ねえカズマ

恥ずかしいし、今の私の気持ちを言つたら『何言つてんだお前』つ  
て言われそうだけど

あえて言うわ

カズマ

私の誕生日を作ってくれて  
私の為に誕生日会を開いてくれて  
私を……この世界につれてきてくれて

アクラ 「ありがとうね！」